

研究ノート

「センザンコウ」と多産性

——メアリー・ダグラスの論文をめぐって——

鉄 井 孝 司

一

個別社会が、自らの部族的宇宙内の動物種をどのように分類しているのか、という問題は、言うまでもなく自然の問題である以上に文化の問題である。

この動物分類をめぐる民族誌的研究に対する、レヴィ・ストロースの『野生の思考』の影響の大きさは今更論ずるまでもないが、この小論で取り上げるメアリー・ダグラスの「レレ族の宗教シンボリズムにおける動物」(Animals in Lele Religious Symbolism)は、その『野生の思考』に先立つ一九五七年に発表されたものであるにもかかわらず、新たな問題領域への萌芽が見られるという点で興味深い。

この中でダグラスが扱っている「センザンコウ」という

動物は、彼女のその後の著作でも各所に姿を見せることになり、動物分類の民族誌的研究の中で「火喰鳥」<sup>(2)</sup>などとも分類上の異例(taxonomic anomaly)の種の典型であるということがきよう。

このダグラスの論文は、主として生の<sup>(1)</sup>ままの民族誌的情報を記述するにとどまり、またその情報も十分満足できるといふものではなく、その結果、決して分析的であるとは言えないのであるが、ここから興味ある問題が引き出される余地は十分にあると思われる。そのことは、後にこれらの資料を駆使してまとめられた著作(Purity and Danger 1966)を読めば明らかになるだろう。

レレ族は狩猟を彼等のあらゆる諸活動のうちで最上位のもの<sup>(1)</sup>とみなしている。そして彼等は、自分達をとりまく自然に対して鋭い知的関心を示す。彼等は狩人であると同時に、他の生きとし生けるものたちに、ある種の共感さえも

抱いている。そこでは動物によるシンボリズムが豊かに脈打っているのを見ることが出来る。

二

レレ族の宗教生活は、次のような儀礼集団によって営まれている。

まずはじめに、「占者のグループ」(Diviners' Group)。この集団への志願者は、夢による呼び出しを受けることにならなければならない。事実上、イニシエーションのみによって、加わることができる。

次は、「双生児の両親」(Twin Parents)のグループ。これにはイニシエーションはともなわぬ。双生児の両親は、加入料を支払い「双生児の占者」(Twin Diviners)にならねばならない。

三番目は、「ビゲッターズ」(子供を産ませた者)(Begetters)。志願者は、子供を(少なくとも)一人産ませ、加入料を払い、イニシエーションを受ける必要がある。このビゲッターズ構成員のうち、両性の子供(すなわち、男の子と女の子)を産ませた者は、他のグループ、すなわち「センザンコウ」の儀礼(Pangolin Cult)を行なうグループに加入する資格も与えられる。

センザンコウと多産性(鉄井)

最後は「神の占者」(Diviners of God)のグループ。このグループの構成員は、イニシエーションによってではなく、超自然的存在、すなわち精霊との直接のコミュニケーションによって、その力を獲得するとされる。

これらの儀礼集団の主な役割は、子供の多産と狩猟の成功をもたらすことにある。ただ「ビゲッターズ」だけは例外で、ここでのイニシエーションは主として通過儀礼であり、間接的に他の儀礼集団を補助することによって、多産と大猟に寄与していると考えられている。

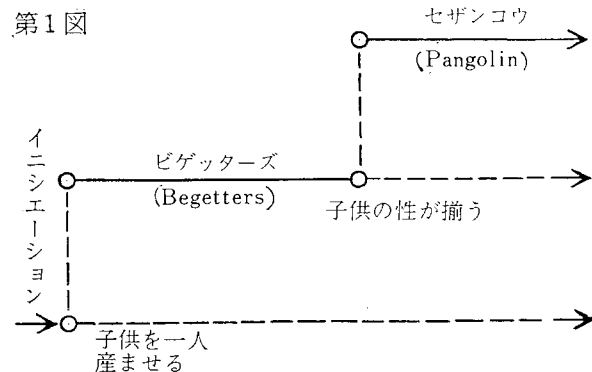
確かにダグラスの言うように、これだけの事実だけからすると、構成員の間に重複が見られる(同一人が同時に二つ以上の儀礼集団に属することを防がないので)くらいで、グループ間の関係は、どういったものかわからないようにも見える。

しかし、新たな事実を考慮に入れる前に、これらのグループ間に、ある種の不均質性が認められることを指摘しておきたい。

第一に、性別ということからすると、「ビゲッターズ」および「センザンコウ」の二グループは、男性のみのメンバーによって占められている。その他のグループでは、性別を問題にしないようである。さらに、「センザンコウ」の場合は、加入者の性別のみでなく、加入者の子供の

性別も問題となる。すなわち、男、女の性が揃っていることが条件となる。

第二に、加入に必要な条件であるが「占者のグループ」では夢における召喚という擬制的な規制はあるものの、加入しようとする者の自由意志に任されているようにみえる。



「双生児の占者」においては、双生児の両親になるという蓋然性は非常に低いのだが、もしそうなれば、必ず加入せねばならない。すなわち、ここでは極めて低い蓋然性と、自由裁量に任されることのない必然性が連結されている。加入料の支払いが付加的なものにすぎないと思われる。

神の占者について

第 1 表			
儀礼集団	加入に必要な条件		
非通過儀礼的・性別不問	占者のグループ	イニシエーション (夢の召喚)	自由裁量的
	双生児の占者	双生児の両親であること (加入料の支払)	極めて低い蓋然性 自由裁量の 必然性
	神の占者	超自然的存存との直接のコミュニケーション	
通過儀礼的・男性のみ	ビゲッターズ	(子供を一人産ませること) イニシエーション加入料の支払	非自由裁量的
	センザンコウ	上のメンバーで両性の子供を産ませたもの	非自由裁量的

ビゲッターズとセンザンコウの間の点線は、非連続を、加入に必要な条件は前提条件、もしくは付加的条件であることをそれぞれ示す。

の動物が禁止されているので彼等はほとんど肉食主義者のような禁欲生活を送っている。

このような記述からみると動物の体の各部分が、それぞれの儀礼集団と結びつけられているのではないか、と考えるようになるのだが、これ以上の詳しい記述はない。

他の社会と同じように、レレ族自身は彼等のシンボリズム

センザンコウと多産性 (鉄井)

は、詳しい記述がないので良くわからない。超自然的存在 (精霊) との直接のコミュニケーションは「占者のグループ」における夢の召喚のような擬制にすぎないのか、あるいは自由裁量の余地は全くないのか。

「センザンコウ」は「ビゲッターズ」の「部分集合」をなす。あるいは、「ビゲッターズ」は「センザンコウ」を含むといえる。先後関係的には、ほとんどの男性は「ビゲッターズ」にまず加入し、しかる後に「センザンコウ」のグループにも加入するようになる。(第一図)

したがって、これら二つのグループの関係は、他と違って一つの条件 (子供を産ませること) に関して非連続的ではない。このことと構成メンバーが男性のみに限られていて通過儀礼集団の性格をもっていることから、これら二つの集団はとりわけきわ立って見えるように思われる。

以上を整理すると第一表のようになる。

さて、ダグラスの記述に戻ろう。

動物種が儀礼の対象となるのは、「センザンコウ」儀礼だけである。他の儀礼では何らかの動物の部分加入者に供される。「占者のグループ」ではすべての動物の肩の肉と、すべての動物の子供が与えられる。

禁忌の方では、「双生児の占者」は動物の背中肉を食べてはならない。「神の占者」に対しては、あまりに多く

ムをほとんど説明することはしないのだが、一方、異なった動物種が伝統的に、これらの儀礼集団に関連づけられていることがわかる。

それらのうち、野豚については比較的はっきりとしている。彼等は、それらを「占者のグループ」の動物だとみなす。何故なら野豚は、川の水源の湿地にしばしば近づき (川には精霊が棲んでいる、と言われる)、また、動物の中で一度に一番たくさんの子供を産むからだという。

その他の場合、関連性についてのはっきりした説明がないので、異なった動物に関する禁忌は、単に儀礼のメンバーシップ弁別のための記章に過ぎないように思われる。

特に、レレ族の場合のように近隣諸部族の儀礼を導入するのによぶさかなく、かなり混雑度の進んだ社会では、これらの儀礼集団は相互に有機的なつながりを欠く、単なる歴史的なものではないか、と考えたくなるのも無理からぬことである。

しかしながら、何故に「センザンコウ」が豊穰儀礼の対象でなければならないのかという問いをおし進めてゆくと、これらの儀礼集団の、様々な動物に対する禁忌といったものは、人間と動物に関する、より広い枠組の中で捉えられなければならないことが明らかになってくる。

このより広い枠組は、レレ族たちが彼等の経験をそれを

通じて無意識的に組織化する「公式化されないカテゴリー」を構成する。彼等がある一連の事実と、他の事実との間に指定する暗黙の (implicit) 関連がわかり始めると、形而上学的な思考の枠組が浮かびあがってくるようになる。

「……この枠組の中で、センザンコウの中心的役割、レレ宗教におけるその他の動物の重要性を理解することは、困難ではなかった。異った儀礼集団は、もはや関連性のない、重複したものとしてでなく、同じ基本的主題の相補的展開として現われてくる。」 (Douglas 1975, p. 28)

そこでわれわれもダグラスに沿って、レレ族の自然的秩序における動物の位置を跡づけてみよう。

### 三

レレ族は、彼等の部族的世界の秩序に対する、はっきりとした概念を持っている。それらは少数の簡単なカテゴリーに基づくものである。

まず最初は、人間と動物との区別である。第一に人間と動物を隔てているものは、われわれの社会とほとんど変るところはない。すなわち、人間は知的で礼儀正しく、動物は野蛮で理解能力を持たない。このことが彼等をして、動物を恥や憐みなしに狩し、あるいは殺すことを可能にする。

た、犬と鶏とが森に棲む親類 (ジャッカルとヤマウズラ) からどれほど村を離れるように請われ続けたかを語っている。

レレ族の、犬と鶏に対する伝統的な態度は、多くの場合家畜は本質的に異例のもの (anomaly) であるという観念と一致している。

人間の住居を荒らすネズミに対しては、レレ族は嫌悪を感じるだけである。その他の「異例の」動物に対する態度と一致して、彼等は決して犬や家の中のネズミやハツカネズミを食べない。女は、この忌避を他の多くの種類のネズミおよび全ての家禽に拡張する。

いくらかの野生の動物が、時々人間を襲ったり、村の近くをさまよったり、村へ侵入して鶏や山羊を盗んだりするという事実は、信じられているところでは、二つのものによって説明される。すなわち、邪術と靈魂の再生 (輪廻) である。

これら個々の「逸脱者」とは別に、「逸脱種」とでも言うべきものが存在する。レレ族の動物分類では、子供の産み方、眠り方、水の飲み方、あるいは餌の食べ方によって一種のサブ・カテゴリーが与えられている。サブ・カテゴリー内の特徴には、ある一貫性があり、その結果、異った種を区別することが可能となる。たとえば肉食動物は柔毛

センザンコウと多産性 (鉄井)

る、一種の道德的認可を与える。

二番目に、動物に特徴的と考えられているのは、その著しい多産性である。この点において動物は人間より優れているとみなされている点は興味をひく。人間における不妊の原因は邪術 (sorcery) に帰せられる。動物の不妊は、通常そのようにはみなされない。豊穡儀礼の呪文は森の動物たちの多産性に言及し、何故人間は動物のようにたくさん子供を産まないのか、と問いかける。

動物を特徴づける三番目の基準は、その自然的秩序における領域の受容ということである。つまり、ほとんどの動物は狩人から逃れようとし、人間とのあらゆる接触を避けて自分達のテリトリーから出ることはない。それでも時々、これらの習慣とは反対に人間と動物との境界を無視する動物も存在する。動物に特徴的な行動からのこのような逸脱は、それらが全くの動物ではなく、半ば人間であることを示していると考えられる。その主な例として家畜と害獣 (vermin) がある。

最近になって、山羊、豚、そしてアヒルがもたらされるまで、レレ族が飼っていた家畜は、犬と鶏だけであった。犬と鶏については、ある寓話が伝わっている。それは、この両者の最初の先祖、つまりジャッカルとヤマウズラがどのようにして人間と運命を共にするようになったか、ま

とかぎ爪を持ち、すべすべした皮やひづめを持つカモシカのような草食動物とは区別される。卵を生む生物は翼を持ち飛び傾向がある。哺乳動物は四本足で歩き、あるいは木に登る、等々。

しかし、それにもかかわらず通常の方法による分類をものもしないある種の動物が存在する。卵を生む四足獣、鳥のように飛ぶ哺乳動物、あるいは水の中にすむ陸棲動物、陸にすむ水棲動物……。

ここで再びレレ族の動物に関する禁忌を分類体系の中で検討してみよう。

レレ族の儀礼では、女性とある種の動物の接触に関する制限があらわれるのがしばしばである。しかし、他方で儀礼的規制は存在しないにもかかわらず、単に分類体系の中で異例であるという理由によって避けられている動物もみられる。ムササビ (またはモモンガ) がその一例である。この動物は、うろこ状の尾を持ち空を飛ぶ。鳥なのか動物なのかははっきりしないが故に、女性によって忌避される。「精霊動物」として分類されるものの中に女性に適用される禁忌の付着しているのが認められる。

これらの「精霊動物」は、それ自身が精霊であるといわれたり、精霊の顕現とみなされたり、あるいは精霊と密接な関係にあるためにそのように呼ばれたりして、そ

の精霊とのかかり方は一様ではない。<sup>(7)</sup>

女性はいエロー・バブーンと小センザンコウに触れてはいけない。触れてもよいが食べてはいけないものに、陸ガメと

いエロー・バブーン(ヒトの種類)がある。

ナイル大トカゲについては、レレ族の間で最大のトカゲであり、人間にとって危険な両棲類と考えられているが、「ワニのイトコ」と言われることからすると、彼等のワニに対する態度等が明らかになれば、もっとはっきりするかもしれない。センザンコウは、後に詳しく検討することにする。

カメは、その形態的特徴と卵を生む四足動物であるという点において異例である(もともと、これはダグラスの見解であって他の情報が集められれば違った連関が存在するのかもしれない)。

いエロー・バブーンに対しては、レレ族自身によって、興味のある説明がなされている。それは他の動物と違い、獵人に立ち向かう。また、群をなして水の中に入ってゆくときにはメスは子供を抱きかかえるのだが、子供のいないメスは、あたかもそれが子供であるかのごとく石を同じように取り扱う。つまり彼等も人間と同じように不妊を経験しているのだ。その上、水の中へ入ってゆくのは、単にそれを飲むだけでなく、それで体を洗うためである。更

触れたが、同じことは、水の中に入るカモシカの種類についても当てはまり、女性はそのを食べることができない。

また、昼間、目を開いたまま眠る別のカモシカは夜行性で昼間は眠りにつくと考えられている精霊に結びつけられていて、同じく食べることが禁止される。

ダグラスは、これらの事実を列挙した後、次のように言う。

「自らをとりまく環境を理解するための、第一の本質的な手順は分類することによって全くの混沌に秩序を導入することであるのは疑いのないところである。しかし、どんなに単純な分類図式のもとでも、ある動物は異例(anomalous)であるようにみえる。」(ibid. p. 32)

そして彼女はポール・クロードル描くところの、鯨の身体の異様さや、申命記に見られる食物禁忌の例を挙げ、その反応の仕方は違っても(一方は、異例のものから単に目をそらすだけであるが、他方は禁忌としてあらかじめ定めておく)、これらの態度とレレ族の、ある動物に対する態度は、共通して同じような「異形」のものが人間に及ぼす不快なイメージによっていると結論する。

ここでわれわれは、デュルケームが自らの明晰さを危くさせた情緒性という怪物に再び取り憑かれてしまったのではないだろうか。<sup>(8)</sup>しかしながら、はっきりした形ではない

センザンコウと多産性(鉄井)

に彼等は精霊が掘ったものだと言われる深い浸食峡谷で風雨をしのぐ。「占者のグループ」のイニシエーションでは、これらの深い峡谷の一つに降りて底の泥を持ちかえるという試練が課せられているのだが、いエロー・バブーンは、いわばこの試練を実行しているとみなされる。

一方、女性の妊娠との関連では次のような禁忌が見られる。

大ネズミは、女性が妊娠しているとき以外、食べてはならない。この動物は地面に穴を掘ってすむことから、死者の亡霊と結びつけられている。<sup>(9)</sup>

穴の中で眠るという習性をもつ動物は精霊と結びつけられているように見え、事実、女性がそれを忌避することを要求されるいくつかの精霊動物は、そのような特徴をそなえている。しかし他方、地下にすむもので精霊動物に分類されていないものもあり、ダグラスは穴の中で眠るという習性によって、一つのカテゴリーがつくられることには疑問を提出している。

ヤマアラシと大センザンコウも精霊動物であり女性が妊娠している間は食べられない。

地面に穴を掘って隠れるアリクイは、ある豊穡儀礼の終了直後の四カ月間を除けば食べることができる。

水と精霊動物との間の密接な関係は、野豚について少し

けれども、ダグラスは、前に引用した様々な例の中に、分類体系の中で「対立」のメカニズムが主要な役割を演じていることに気づいているようである。

すなわち、人間/動物の二大区分、また、その分類の原理としての清浄/汚穢、動物の棲息領域における、空/地、地上/地下、陸/水、等々。これらの二分図式は、それぞれ単独で作用しているのではない。さらに歩を進めることによって、われわれはたとえば、次のように解釈することはできないだろうか。

妊娠期間中に、女性が普段は禁止されている大ネズミを食べるのは、この動物と緊密に結びつけられている死者の亡霊(祖先)が再び胎内に宿っていると考えられているからではないだろうか。つまり、既に性的な交霊が終えられた後は、食事上の交霊も許されてしかるべきなのだ。

しかしながら、このように解釈したとしても(事実、このような関連があるのだとしても)、それだけではまだ不十分である。何故、大ネズミだけが特に選ばれるのかが明らかでないからである。

分類体系の全体図を、おぼろげながらも浮き出たせうとすれば、さらにレレ族における多産の意義、精霊についての観念、死と再生の関係、生産活動、等々、様々な局面を含んだコンテキストの中で考察することが必要となっ

てくるであらう。

#### 四

次にわれわれは、レレ族の間に見られる動物の中でもっとも特異な存在であり、高い權威を認められている儀礼集団にその名を与えている「センザンコウ」について、ダグラスの分析にそって検討してみることしよう。

センザンコウの形態的特徴は一見して誰の目にも明らかである。体一面うろこでおおわれて、魚の怪物のように見えるにもかかわらず陸上(あるいは樹上)に棲む。

水と精霊との密接な関係は以前に述べた通りであるが、レレ族では実際に水の中に棲むか、もしくは水にしばしば近づく動物はすべて精霊動物とされる。センザンコウには水との直接の関係はない。

しかし、一方で動物の様々な「異例」の性質が「精霊動物」のカテゴリーをつくるのに一役買っていることと、レレ族の間では人間の多産は精霊のなせる業であると考えられていることを思い起こすと、センザンコウと多産性の間に関連のあることが明らかになる。(ibid p. 33)

さらに、この動物の興味ある特徴をあげよう。センザンコウは他の動物と違って、獵人に追われると逃げ出すので

はなく、体をまるくしてその場にじっとしている。そこで獵人は動物がやがて首を出すまで静かに待ち、そして頭をしたたか打つことによって、苦勞することなく捕えることができるのである。これは人間に自らの体を捧げているのだと言われ、このような習性もまた、精霊のなせる業だと考えられるのである。

もう一つ興味深いことには、彼等の言うところによると、センザンコウは人間のように一度に一匹しか子供を産まない。これは、多産性をその特徴とする動物界において特異なことであり、このことが彼等をしてセンザンコウを動物と人間との間の特別な絆として扱わせしめるのである。

この意味において、真にセンザンコウとは逆対称的な位置にあるのが、先記した双生児の両親である。彼等は人間でありながら動物のようにたくさん子供を産む(あるいは産ませる)。

レレ族においては、人間と動物との対立は根本的であり、動物と似たような行動をとる人間は厳しい非難の対象とされるが、多産性のみは例外である。

かくして、双生児の、あるいは三つ子の両親はイニシエーションなしで呪術的な能力を獲得することができるのである。

女性が男性と全く同じ資格で儀礼を遂行することが許される「双生児の占者」は、女性が常に従属的立場におかれるレレ族では異例である。「双生児の両親」は、人間と動物の間を仲介するべく精霊によって選ばれたのであり、センザンコウは動物の領域でこれと対応する役割を果たす。

(ibid pp. 33-35)

ダグラスはセンザンコウを精霊動物とみなす理由を説明したけれども(本論 p. 96)、「何故にセンザンコウが豊穡儀礼において主要な役割を果たすのか」という問いに対しては、今検討した仲介者としてのセンザンコウの性質の方がはるかに満足のいく解答である。単にセンザンコウが精霊と結びつけるだけの理由では「何故にセンザンコウが選ばれて他の精霊動物が選ばれないのか」という問いに答えることはできない。

前にも少し触れたが、レレ族における、いわゆる「精霊動物」と精霊との関連は様々であってはつきりしない。それに加えて、水に密接に関係している精霊と、地下にすむといわれる「死者の亡霊」(「祖先」とは、ダグラスの記述によると、ともに「精霊」として一括してあるようだがこれも再考を要すると思われる。

ともあれ、ダグラスのように、多産性を精霊と結びつけて問題とするのなら、豊穡儀礼には、精霊動物であり、か

センザンコウと多産性(鉄井)

つ動物界で子供を(一度に)一番たくさん産むという野豚が何故儀礼の対象とならないのだろうか。

第二図から明らかなように、動物界の多産性の極である野豚と人間の間は本来的に遠く分離されている。この両者を結びつけようとするれば、儀礼という一時的な関係の設定の場においてさえ非常に困難である。そこで、動物界という一つの領域の中では野豚と連続した関係にあるが、「多産性」という意味ではもっとも遠い、したがって人間とはもっとも近いところに位置するセンザンコウが選ばれるのだ、と結論することはできないだろうか。

このメカニズムは、単にある動物が分類体系の上で異例であるが故に、あるいは水と関連性を持つが故に「精霊動物」とされるということは互いに別の次元に存在しているように思える。

ダグラスはさらに、魚が他の動物に比べてより精霊と密接に関連している、妊娠している女性や儀礼集団の newcomers にそれを食べることが禁止されているという事実に注目する。そして彼等が魚をとって村へ持ち帰る際には周到な禁忌を要することに言及し、濡れたもの／乾いたもの、というもう一つの二分法を設定する。

その結果、彼女は多産性という点に関して人間と精霊の間に関係を設定しようとするときには、魚(濡れたもの)

は人間(乾いたもの)の仲介をすることができないので、「半ば魚であり、半ば動物であって人間に対して友好的なセンザンコウが、その役割を演じる傾向にある」(ibid. p. 38)と結論することになる。

確かにセンザンコウの、上記のような特徴が、その分類上の特殊な地位に何らかの意味をもっていることは疑いがない。だが、ここでも彼女は多産性の最たるものである野豚の問題をなおざりにして多産性の問題を単に、それにあずかって力があるという理由だけで「精霊動物」に置き換えているように思われる。

ダグラスの結論は、それに至るまでの示唆に富む記述にもかかわらず重要な点が欠落しているように思えてならない。それはともかく、レレ族の社会においてはこれら三つの領域、すなわち人間、動物、超自然的存在(精霊と死者の亡霊)は区別されてはいるが、その間に何らかの相互関係のある一つのシステムを構成していることは疑いがない。この体系の概念的仮説モデルを図式化すれば、第二図のようになる。

まず、世界は人間と動物、そして二種の超自然的存在(精霊と死者の亡霊)とに分けられる。人間はさらに儀礼集団と非加入者に下位区分される。儀礼集団は本来的に人間と精霊とを仲介しようとする目的をもち、一種の「中間

的存在」である。儀礼集団はそれらが得ようと願う「多産性」を基準にして配列される。すなわち、「双生児の占者」はもっとも動物の領域に近いところに位置し、センザンコウ儀礼グループは、その次に置かれる。「占者のグループ」は野豚と密接な関係にある(本論 p. 91) ことからそれと対応する場所を占める。

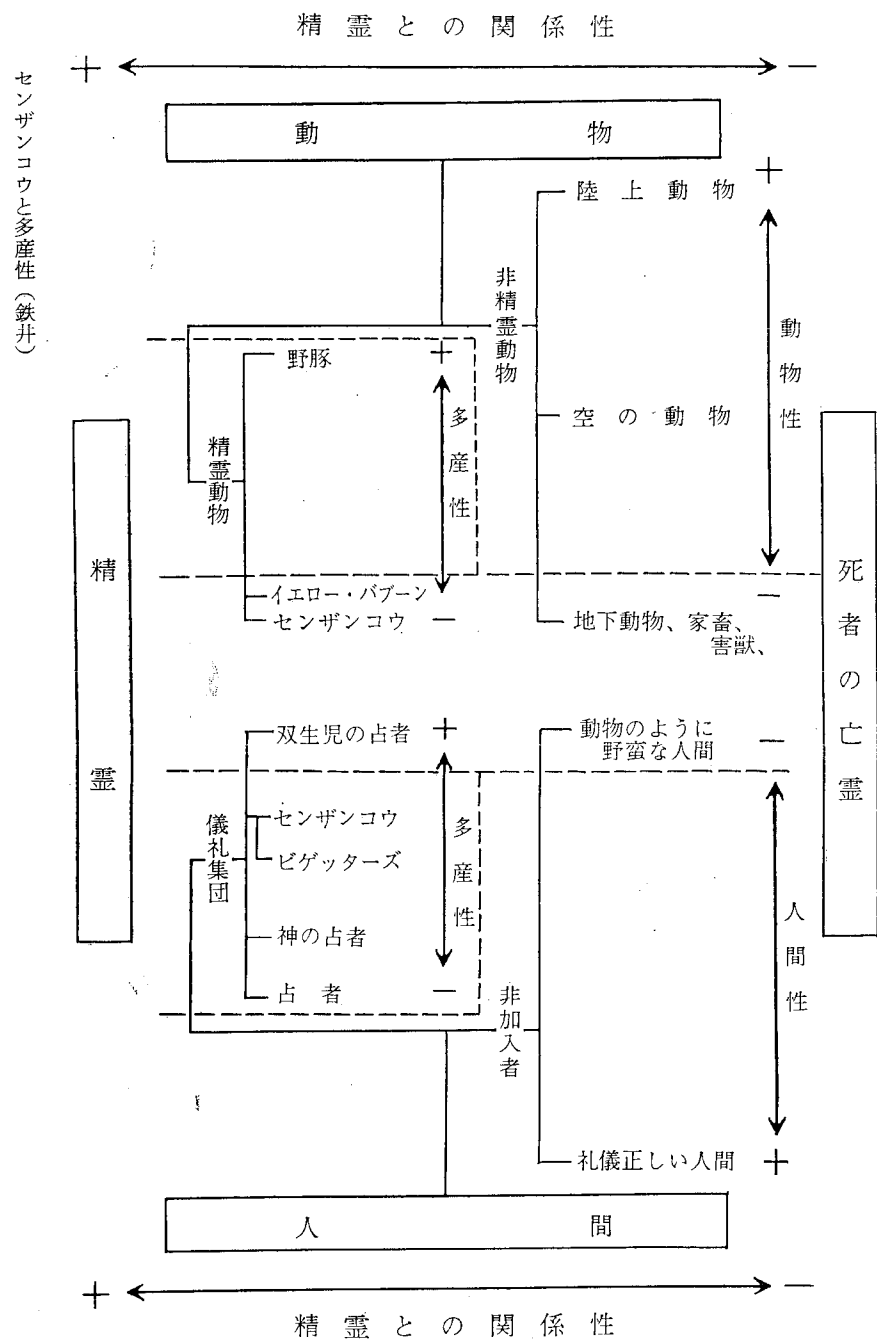
非加入者の方では「人間性」が基準となりプラスの極には礼儀正しい人間、マイナスの極には動物呼ばわりされる人間が想定され、それは「多産性」の故に同じように動物の領域に近づいている「双生児の占者」と対比されよう。

一方、動物の領域では、まず精霊動物が人間における儀礼集団のように中間的存在である。精霊動物の内部では、「多産性」に基いて、プラスの極には野豚、マイナスの極にはセンザンコウが位置し、この両極間には、水に密接に関係する様々な精霊動物が含まれる。

非精霊動物は主としてその棲息領域によって「動物性」を規定される。陸(地)上の動物は、もっとも普通の動物としてプラスの極に、地下にすむ動物は死者の亡霊と関連し、家畜および害獣は人間と生活領域を同じくすることから、これらはともに異例のものとされ、マイナスの極に位置することになる。

精霊と死者の亡霊は、ある意味で対立するものではある

第二図



が、ともに「超自然的存在」として人間界、動物界の外に位置する。

図中、点線で示した中間領域内部では、変換の可能性があると考えられる。したがってこの領域を介して精霊と死者の亡霊も混然一体化する傾向を持つ。

付け加えておくならば、儀礼集団では全く「人間性」という基準が問題にならないという意味ではなく、集団として考えたときには非加入者に比べ、多産性の基準が優越しているということである。同じことは動物における「多産性」と「動物性」の間の関係についても言えよう。

さて、この図から明らかなように、構造的には人間における「双生児の占者」と動物におけるセンザンコウとは逆対称の関係にあり、何故「センザンコウ」の名称が双生児の両親に与えられずに、男性の通過儀礼的集団の発展的形態に与えられるのかという疑問が起こってくる。

すでに検討したように、確かに「センザンコウ」も「双生児の占者」と同じように、その成員権獲得は自由裁量的なものではなく、しかも「多産性」にかわるものである。しかし、それは第一図のように他と違った特異な構造をもつものでもある。さらに「センザンコウ」が通過儀礼的集団の「ビゲッターズ」と非連続なものではなく、「ビゲッターズ」が豊穡儀礼に間接的な役割しか果たさないことを想

い出せば、センザンコウが豊穡儀礼の対象となる唯一の動物であるとしても、その本来の役割が豊穡儀礼としてではなく通過儀礼の方にあるのではないかと考えることも許されよう。

したがってわれわれが検討してきたような多産性に関して人間と動物と精霊の仲介者たるセンザンコウの役割は、男性の通過儀礼的集団にその名を与える際にはそれが仲介する領域(人間-動物-精霊)は同じであっても、「多産性」以外の意味づけが可能なのではないかという仮説が提出される。

もう一つの可能性は、センザンコウは本来構造上の位置からして当然「双生児の占者」にその名を与えるはずであったにもかかわらず、何らかの理由でそれが防げられ、同じように人間と精霊とを仲介する他のグループに投射されてしまったのではないかと考えることである。その際の理由は次のように言うことができる。すなわち、センザンコウが一度に一匹しか子供を産まないのに双生児の両親は一度に二人の子供を産んだ(産ませた)のだから。

いずれにしても「レレ族における儀礼集団の相補的な関係」は、ダグラスの言う程には明らかに<sup>(12)</sup>なっているとは言い難い。

センザンコウの「多産性」に関する役割と、男性の通過

儀礼的集団の発展的形態にその名を与えている役割との間には、われわれの結論をとるにせよダグラスの結論をとるにせよ越え難いみぞが存在する。

註(1) 'Purity and Danger' 1966 及び 'Implicit Meanings' 1975

(2) 「火喰鳥」に関しては次の論文を参照。

Bulmer, R. 1967. 'Why is the Cassowary not a bird? A problem of zoological taxonomy among the Karam of the New Guinea Highlands', *Man* (n.s.) 2: pp. 2-25

(3) 「ビゲッターズ」のイニシエーションが通過儀礼的意味あいを含んでいることを知れば、これに加入することは一種の「義務」であると言っても良いであろう。従って「子供を産ませること(性別不問)」は時系列の上における一つのメルク・マイルではあるが、極めて蓋然性が高いために「双生児の占者」における「双生児の両親であること」のようなものと同一レベルの「条件」とは言い得ない。ここではむしろ「イニシエーション」の方に重点が置かれていると思われる。

(4) 民族動物学から民族解剖学へ。Lévi-Strauss 1966, p. 152, Fig. 8 参照。

(5) ダグラスの註によると、レレ族の言語では正確に「肉食動物に該当するものはないが、彼等はそれを指して huta pok (皮のある動物、又は毛皮のある動物)」という

センザンコウと多産性(鉄井)

語を用いる。更に「卵生の」、「哺乳の」といった用語は存在しないが、彼等の、動物の誕生に関する知識は極めて正確なもので、我々の社会の動物学者と同じようにレレ族にとっての分類の一つの基準を提供していることは疑いを入れない。

(6) 詳しくは Douglas, 1955。この忌避が何故に女性のみ適用されるのか、又、このように儀礼的規制を伴わないものと、以下で論じられているような儀礼に関連した忌避との関係がどのようなものであるかという問題は残す。

(7) 精霊とそれに密接な関係をもつものの間の同定<sup>(13)</sup>の多様性の問題については Firth, 1966, pp. 10-11 参照。

(8) Douglas, 1955 によると、レレ族の觀念においては、きれいなもの/きたないものの間の区別は重要な二分法を形成しており、それによって自らの身体を洗いきれいに保つ人間とそうでない動物という対立が考えられ、人間/動物の区別に一つの基礎を与えている。

(9) レレ族では死者の亡霊はしばしば bina hin (地下の人々)と呼ばれる。

(10) 分類の問題に対する、デュルケーム(また、マルセル・モース)の貢献を忘れることはできないが、レヴィ・ストロースが厳しく批判している如く、「感情的な親近度」に従って諸事物は分類された」というような、デュルケームに見られる「情緒性」への過剰な傾斜は、いくら指摘しても指摘しすぎることはない。如何なる場合で

も「情緒性」といったような感情は、何ものかの「帰結」ではあっても決して「原因」ではありえない。

- (11) 人間に対して「動物である」と言うことは、<sup>1</sup>「<sup>2</sup>」族を介して極めて効果的な侮蔑語になりうることをあらわすのことがよくわかる。(Douglas, 1956 参照)

(21) 本論 p. 92

#### BIBLIOGRAPHY

Douglas, M.

1955 Social and Religious Symbolism of the Lele.

*Zaire* 9.

1975 Animals in Lele Religious Symbolism. In

'Implicit meanings' M. Douglas. Routledge  
& Kegan Paul. (First appeared: Africa 27.  
1957).

Firth, R.

1966 Twins, birds and vegetables: problems of  
identification in primitive religious thought.  
*Man*. (n.s.) 1.

Lévi-Strauss, C.

1966 *The Savage Mind*. The University of Chi-  
cago Press. (First appeared: Librarie Plon.  
1962).



Tree pangolins Implicit Meanings P34